

洞察の上に築かれてゐることを知らねばならぬ。この意味に於て著者は飽までも學徒であつた。それ故にこそ、その叙述は努めて平易なるを期しながら尙且つ著者独自の見解の行間に閃くものがあつて私達に深い示唆を投げかける。住民の章に於て、夷東南蠻と稱せられた海岸島嶼民族が漢民族の文化に有力な作用を及ぼしたものと論じた如き、恐らくは著者自身も快心の一節であらうか。

その叙述の方法は、いはゞ歴史主義者である著者として當然歴史地理的である。それは艦でロシング・バックを以て淮南子を裏付ける態度であり、又支那工業の勃興を希望して「せめて康熙乾隆の盛世にまで更生するやうにしたい」とまで語らしむるものであるが、かゝるものが、かの履「無味乾燥」の一語で片づけられる分析的方法よりも記述を多彩にし感銘を印象的ならしむる効果があつて、本書の目的に最もよく副ふたものであることは否まれぬところである。行文は、この著者のどの著述にも見られるやうに極めて平明であるばかりでなく、豊富な圖版や寫眞と相俟つて殆ど紀行文にみるやうな具體性さへもつてゐる。

たゞ本書が全般的な支那地圖を附載しなかつたのは何故であらうか。坊間にその類が多いとはいへ、この書の性質よりしても、常に本文と對照せしむべき一葉の圖幅を欲するのは望蜀の念のみではあるまい。引用書のこと、序文に斷り書はあるけれども、なほ著者が多年涉獵した重要な書目を擧げたならば、後進の我々を披導するところより大であつたらうと惜しまれる。

なほ終りにこの書が著者還暦の日に成つたものであることを附記して聊か著者の爲に祝意を表したい。(四六版、三八〇頁、東京富山房發行、定價貳圓五拾錢)(室賀信夫)

大陸潜行記

エラ・マイアール著

多賀義彦譯

最近の我國の出版界に於ける一つの傾向として、陝西・甘肅・青海・寧夏・新疆などの支那の西北邊疆諸省に於ける旅行記の翻譯書が續々と出版されることが認められる。例へば昨年度の出版に於ても、陳賡雅「支那邊疆視察記」・長江「中國の西北角」・蘭州西安寧夏「ヘディン」馬仲英の逃亡「中央亞細亞探險記」・マイアール「大陸潜行記」などが擧げられる。それは云ふ迄もなく日支事變以來我々一般にも、今後の新支那建設に際して西北地方が如何に重要な意義を有して居るかはつきりと認識されて來たからであるが、併し今迄の所餘りにも我々の關心が此等の地方に拂はれて居なかつた爲、差當つての我々の欲求を充すものとして、先づ此等の邊疆地方の所謂ルポルタージュが求められるのは當然のことであらう。

「大陸潜行記」は Ella Kuni Mailart. Forbidden Journey from Peking to Kashmir. 1938 の全譯書であるが、著者マイアールは譯者の序文によればコスモポリタンとも云ふべきスイス生れの若い婦人記者である。本書の内容の一つ一つに就いては紹介

(織田武雄)

第二回暹羅國經濟調査報告

アンドルース編

Stamm :

2 nd. rural economic survey, 1934-1935.

by J. M. Andrews

一九三一年暹羅國政府は經濟政策の根本策を樹立する爲に第一回田園經濟調査を行つた、チンメルマン氏の手によつて送られたその報告はこの國經濟の様相を明にする所鮮少なからざるものがあつた。田園經濟調査といふはこの國の經濟發展段階を示すもので暹羅國生産活動の全面的檢討を行ふものに他ならぬ。

第二回調査はアンドルース氏の指導下に政府並にハーヴァード大學の協力により一九三四年より三五年にわたつて行はれたものこの經濟調査とともに衛生方面の病歴調査、人類學的計測、土壤の化學的細菌學的調査が同時に行はれて、夫々獨立の報告書をなしてゐることに注意しておく。

調査法は前回のものを踏襲してゐるわけであるが、budgetary method と稱して現金收入及支出によつて一家一年間の豫算表ともいふべきものを調査者が質問によつて得たる所によつて作製する。被調査家庭が事實を隠蔽せざる様の配慮は調査法のうちに周到に盛込まれてゐて、約一千七百家族について調査が行はれた。調査對象に選ばれた村落は四十一、北東、南、北、中央、南東の

する必要もないであらうが、本書は彼女が「プチ・パリジアン」特派員として東洋に來遊した歸途に行つた、北京から青海や新疆を経てカシミールに至るまでの大陸横斷旅行に於ける印象や見聞を書き記したものであつて、彼女と行を共にした「タイムス」特派員 Peter Flemming も亦その旅行記を News from Tartary, 1936 と題して出版して居る。併しフレミングの旅行記が多く政治問題と論じて居ると異つて、マイアールの旅行記は如何にも女らしい温かな筆致を以て、西北邊疆の特異な風物や生活が彼女の高い知性を通じて我々に物語られて居るのみならず、彼女のジャーナリストとしての鋭い才能は、この祕境に絶間ない動亂の數多のホットニュースをも傳へて居る。要するに本書が旅行記として極めて興味深きものであり、報告文學としても價値高きものであることは疑ひないが、それだけ翻譯には難物であらう。然るに多賀義彦氏の多大の苦心によつて、所謂翻譯物とは感じられないまでに完全な邦語にこなされて居るのであつて、恐らくその生彩ある筆は原書にも勝るものであらう。たゞ多賀氏も附記されて居る如くローマ字綴りの中國人名を復原することは甚だ困難なことであるが本書の中のその二三に就いて私見を記すならば、馬仲英の通稱カスリンは葛思靈でなく「小司令」の意味の次司令であり、新疆前主席ヤンツォンシンは楊晉璽ではなく楊增新であり、馬仲英の部下の馬英學は馬英彪、馬何三は馬虎三ではないかと思はれる。またツンアンやオボなども支那回教徒や道標と意譯されずに東干、鄂博とさるべきであらう。(四六九頁、創元社發行、定價貳圓)